

ボストン美術館共同企画

特別展

なん

と

ぶつ

が

南都仏画

—よみがえる奈良天平の美—

Special Exhibition in Collaboration with the Museum of Fine Arts, Boston

*Buddhist Paintings of Nara:
Reviving the Splendor of Classical Tradition*

奈良のみほとけ

なんとうるわしと

構想20年!

ボストン美術館と
奈良国立博物館
夢の共演

Press Release



奈良国立博物館
NARA NATIONAL MUSEUM

MFA Boston
Museum of Fine Arts, Boston

国宝 十一面観音像(部分) 平安時代(12世紀) 奈良国立博物館 【展示期間:7月18日~8月16日】

ボストン美術館共同企画

特別展

南都仏画

—よみがえる奈良天平の美—

Special Exhibition in Collaboration with the Museum of Fine Arts, Boston

Buddhist Paintings of Nara:

Reviving the Splendor of Classical Tradition

日本仏教美術の原点にして頂点

奈良に生まれた「南都仏画」、

史上初の大展覧会

かつて「南都」と呼ばれた奈良に、古代から連綿と受け継がれてきた珠玉の仏教絵画、それが「南都仏画」です。奈良時代には後世まで規範とされていく国際色豊かな天平絵画が大寺院を彩り、平安時代になると貴族好みの優美な仏画が盛んに礼拝されました。南都仏教の復興期にあたる鎌倉時代以降、天平の図像に基づく復古的な仏画が描かれるようになるとともに、「南都絵所」と呼ばれる仏画工房に所属した絵師たちが、仏画や絵巻の制作、さらには仏像の彩色にも携わるようになります。そして近代以降、奈良天平の仏画は日本美術の古典として高く評価されるに至り、新たな日本画を生み出す着想の源泉になるとともに、文化財保護の対象にもなっていくのです。

本展覧会は、米国・ボストン美術館と奈良国立博物館（奈良博）による約20年の構想を経て実現した国際共同企画です。ボストン美術館が所蔵する南都ゆかりの仏画13件が一挙に里帰りする、またとない機会となります。これらに、奈良国立博物館の所蔵品をはじめとする国宝19件、重要文化財69件を含む国内選りすぐりの仏画・仏像を合わせた計171件を通じて、「南都仏画」の歴史をたどる初の試みです。さらに昭和24年（1949）の火災で焼損した法隆寺金堂壁画の色彩が、写真ガラス原板に記録された色情報をもとに最新のデジタル技術によってよみがえり、高精細カラー画像として展示室内で初公開されることも大きな見どころです。ここ奈良博でしか体験できない「南都仏画」の魅力を、ぜひ心ゆくまでご堪能ください。

第1章

法隆寺金堂壁画—日本仏画の黎明

奈良の仏教絵画の歴史は、法隆寺金堂を彩った全12面の壁画の誕生に始まるといっても過言ではありません。力強い線描と豊かな色彩が生み出す雄大で理想的なほとけの姿は、遣唐使がもたらした大陸の図像や絵画表現を色濃く反映するものであり、日本で初めての本格的な仏画様式がここに確立したといえるでしょう。

本章では、昭和24年(1949)の焼損前の姿を伝える金堂壁画の模写や、図像的に密接な関係をもつ国宝「伝橘夫人念持仏厨子」などの重要作品を通じて、南都仏画の原点に位置づけられるその魅力を紐解きます。



アジア仏教絵画史上の最高峰。
南都仏画の原点に位置づけられる
阿弥陀三尊の雄大な姿

法隆寺金堂壁画第6号壁 模写

昭和15～26年(1940～1951) 入江波光ほか筆 奈良・法隆寺
[展示期間: 8月18日～9月13日]



国宝 伝橘夫人念持仏厨子

飛鳥時代(7～8世紀) 奈良・法隆寺 [通期展示] (写真右) 厨子内の阿弥陀三尊像



光明皇后の母・橘三千代ゆかりの
愛らしい白鳳仏。
厨子は貴重な飛鳥時代の絵画を伝える総合芸術

第2章 天平の彩り

平城京に都が置かれた奈良時代、遣唐使を通じて大陸の先進的な仏教文化がもたらされ、東大寺や興福寺などの大寺院が建立されました。堂内を飾ったのは、力強くもしなやかな線描で象られ、赤と青、緑と紫の対比が美しい、華やかに彩られた仏画や仏像です。南都仏教の基盤が築かれるこの時代に確立した図像や絵画表現は、奈良から日本各地の寺院へと広まるとともに、後世の南都の絵師たちが規範と仰ぐ古典となっていくのです。

本章では、南都仏画の様式を決定づけた天平絵画の精華をたどります。

奈良時代の護国の法会で
拝まれた本尊画像。
豊麗な彩色をたたえる天平の美神

国宝 吉祥天像

奈良時代(8世紀) 奈良・薬師寺 [展示期間: 7月18日～8月2日]



第3章 南都の平安仏画

平安時代の南都では、京都の絵仏師によって描かれたとみられる、金銀の文様を凝らした優美な彩色をもつ仏画が広く受容されました。藤原道長が制作に関わったとされる奈良・子嶋寺所蔵の国宝「子島曼荼羅」はその象徴的な存在といえるでしょう。一方で、法隆寺にかつて伝来した奈良博の国宝「十一面観音像」のように、平安仏画を特徴づける精緻で華麗な截金文様を備えながら、奈良時代以来の古様な図像を守り伝える、南都特有の絵画形式も受け継がれていました。

本章では、京都の文化から色濃く影響を受けながらも独自に発展した、南都における平安時代の仏画の諸相を紹介します。

藤原道長が制作に関わったとされる
金銀で飾られた
きらびやかな曼荼羅



国宝 両界曼荼羅(子島曼荼羅)

平安時代(11世紀) 奈良・子嶋寺 [展示期間: 胎藏界(写真右) 7月18日～8月16日、金剛界(同左) 8月18日～9月13日]





法隆寺に伝わった
平安仏画の最高傑作。
斜を向く南都系の図像に、
華麗な截金文様

国宝 十一面観音像

平安時代(12世紀) 奈良国立博物館 [展示期間: 7月18日～ 8月16日]



平安仏画といえば
誰もが思い浮かべる名品。
かつて奈良の寺院に伝わった

国宝 普賢菩薩像

平安時代(12世紀) 東京国立博物館 [展示期間: 8月18日～ 9月13日]

Image: TNM Image Archives

第4章

追憶の天平仏

平安時代末期の12世紀、南都では大陸からもたらされた最新の仏教知識に基づく教学復興が図られるとともに、各宗派独自の礼拝画が生み出されていく過程で奈良時代の天平仏画が再び注目されるようになります。かつて東大寺に伝来したボストン美術館の「法華堂根本曼陀羅」の図像が、東大寺の国宝「俱舎曼荼羅」に引用されたことは、その象徴的な事例です。源平合戦の戦火を乗り越え、鎌倉時代へと続くこの原点回帰の潮流は、天平のほとけの姿を追憶する重要な契機となったのです。

本章ではこうした天平復古の気運の中で、奈良時代の仏像・仏画に理想的なほとけの姿を見出した、南都仏画に特有の図像の淵源に迫ります。



釈迦靈鷲山説法図（法華堂根本曼陀羅）

奈良時代（8世紀） ボストン美術館 [通期展示]

William Sturgis Bigelow Collection Photograph © Museum of Fine Arts, Boston

東大寺に伝来した天平仏画の傑作。
南都で写し継がれてゆく
理想の釈迦の姿

法華堂根本曼陀羅の
図像を忠実に写す。
天平復古を象徴する
南都仏画の記念碑的大作

国宝 俱舎曼荼羅

平安時代（12世紀）

奈良・東大寺

[展示期間：8月25日～9月13日]



第5章

内山永久寺—南都仏師・絵仏師の競演

平安時代に創建され、石上神宮（奈良県天理市）に隣接した地に壮麗な伽藍を誇ったまぼろしの名刹「内山永久寺」。明治初年の神仏分離令を経て廃絶し、かつての栄華を象徴する仏像や仏画など寺宝の一部は、現在も国内外の寺社や美術館・博物館に保管されています。

本章では、ボストン美術館が所蔵する内山永久寺旧蔵の貴重な名画が里帰りするこの機会に、同寺を舞台に活躍した南都を代表する仏師・絵仏師たちが、技を競い合いながら生み出した造形の魅力に迫ります。



京都の宮廷で活躍した絵師が
奈良の大寺院のために描いた
やまと絵の名品

国宝 両部大経感得図（写真左）龍猛南天鉄塔相承図、（同右）善無畏金粟王塔感得図
平安時代 保延2年（1136） 藤原宗弘筆 大阪・藤田美術館 [展示期間：8月25日～9月13日]



内山永久寺旧蔵、南都絵仏師・重命筆。 伝統的図像を継承し、南都仏画の特色を示す

四天王像（写真左から）広目天、増長天、持国天、多聞天

鎌倉時代 建長5年（1253）頃 重命筆 ボストン美術館 [通期展示] Fenollosa-Weld Collection Photograph © Museum of Fine Arts, Boston

厨子側面の扉に描かれる四天王像は、
南都絵仏師・重命が手掛けた
ポストン美術館本と全く同じ姿

木造黒漆塗厨子 鎌倉時代(14世紀) 福井・大善寺 [通期展示]
(写真右) 厨子側面の扉に描かれた四天王像のうち増長天



内山永久寺伝来の群像、

九軀揃って
里帰り

南都で活躍した
伝説の絵仏師・重命と
運慶の孫、仏師・康円の
コラボレーション



重要文化財

不動明王および八大童子像のうち
不動明王、矜羯羅童子、
制吒迦童子

(写真中央) 不動明王、(同左) 矜羯羅童子、
(同右) 制吒迦童子

鎌倉時代 文永6年(1269) 康円作

文永9年(1272) 重命彩色

東京・世田谷山観音寺 [通期展示]

第6章

南都仏教の復興と絵所^{えどころ}

鎌倉時代、南都の大寺院を中心に仏教の教学復興が本格化しました。東大寺の華嚴宗や三論宗、興福寺および薬師寺の法相宗、唐招提寺および西大寺の律宗など、各宗派で新たな儀式が整えられるなか、本尊となる仏像や仏画、祖師像の需要が急増します。これらの彩色や制作を一手に担ったのが、南都を拠点とする絵仏師たちでした。

本章では興福寺に所属した「南都絵所」と呼ばれる仏画工房のうち、特に室町時代末期までその系譜を維持した吐田座・松南院座・芝座の三工房の絵仏師たちに着目し、彼らが描き継いだ中世の南都仏教を彩る絵画の諸相をたどります。

法相宗の継承を示す
現存最古の曼荼羅。
南都仏教の復興を象徴する
貴重な初期作例

法相曼荼羅

平安～鎌倉時代(12世紀) ポストン美術館 [通期展示]

Fenollosa-Weld Collection Photograph © Museum of Fine Arts, Boston



南都絵仏師の命尊が描く、
究極のやすらぎに至った
美しい釈迦涅槃の姿

重要文化財 仏涅槃図

鎌倉時代 元亨3年(1323) 命尊筆 九州国立博物館

[展示期間: 7月18日～8月16日]



修復後初公開

奈良・法華寺に伝来した
十六羅漢図の名品。
南都ゆかりの図像を忠実に継承

十六羅漢図

鎌倉時代(13世紀) ポストン美術館 [通期展示]

William Sturgis Bigelow Collection

Photograph © Museum of Fine Arts, Boston

南都における
仏師・絵仏師の
競演の実態を伝える
重要作

重要文化財

四天王立像のうち広目天・多聞天

(写真左) 広目天、(同右) 多聞天

鎌倉時代 正応2年(1289) 隆賢・定秀作

永仁4年(1296) 慶允・有儼彩色

奈良・薬師寺 [通期展示]



南都随一の絵仏師・命尊による
超絶技巧。インド由来の
女神・吉祥天を極彩色で艶やかに彩る

重要文化財 吉祥天倚像および厨子

南北朝時代 暦応3年(1340) 寛慶作・命尊彩色 奈良・興福寺
[展示期間: 7月18日~ 8月16日]



第7章

春日曼荼羅と 神々の絵画

春日大社に対する信仰に基づく礼拝画を「春日曼荼羅」と呼びます。特に奈良の原風景ともいべき春日大社の神域の景観を描く「春日宮曼荼羅」や、現在でも奈良の象徴である春日の神鹿を描く「春日鹿曼荼羅」は、南都絵所の絵仏師によって中世を通じて描き継がれてきました。また往馬大社や薬師寺鎮守の休ヶ岡八幡宮など、奈良の神社に祀られる神々の絵画を多く手がけたのも、やはり南都絵所の絵仏師たちでした。

本章では、ボストン美術館と奈良国立博物館が所蔵する春日曼荼羅の二大コレクションを中心に、南都の神々に対する信仰を具現化した絵画の魅力に迫ります。

平安時代末期の春日大社の社殿。 現存最古の南都の景観を描く 記念碑的大作

春日宮曼荼羅

南北朝時代(14世紀) ボストン美術館 [通期展示]

William Sturgis Bigelow Collection

Photograph © Museum of Fine Arts, Boston



重要文化財

春日宮曼荼羅

鎌倉時代(13世紀)

奈良・南市町自治会

[展示期間: 7月18日~8月16日]

神域を描く春日宮曼荼羅のなかでも、
精緻な描写、破格の大きさを誇る



春日大社の神域に飛来する神鹿の精緻な姿。
南都絵仏師が描き継いだ伝統の図様

春日鹿曼荼羅

南北朝時代(14世紀)

ボストン美術館

[通期展示]

William Sturgis Bigelow Collection Photograph © Museum of Fine Arts, Boston

第8章

よみがえる奈良・天平の美

明治初期、神仏分離政策の影響により、奈良の仏教美術は存続の危機に陥りました。この窮状の中で、南都仏画の真価を再発見したのがアーネスト・フェノロサと岡倉天心です。彼らは奈良天平の仏画を「日本美術の古典」として高く評価し、その優れた鑑識眼によって見出された奈良ゆかりの絵画作品は、現在、質・量ともに世界最高峰を誇るボストン美術館の南都仏画コレクションの中核を占めています。

フェノロサや天心が日本美術の精髓として絶賛した法隆寺金堂壁画は、昭和24年(1949)、保存事業にともなう模写作業の最中に発生した火災で焼損し、制作当初の色彩の多くが失われてしまいました。この痛恨の出来事は、のちに文化財保護法が制定される契機となり、現代へと続く南都仏画の歴史に深く刻まれています。

本章では、東京美術学校でフェノロサや天心の薫陶を受けた若き画家たちに焦点を当て、彼らが天平古画の模写を通じて得た着想をもとに、新たな美を生み出していく明治期の様相をたどります。さらに本展の結びとして、最新の写真科学技術によって焼損前の彩りがよみがえった法隆寺金堂壁画第6号壁の高精細カラー画像を紹介し、現存する壁画の比類なき価値を未来に伝えていく重要な機会にしたいと思います。



天平仏画をもとに 明治期に復元された正倉院宝物、 よみがえる天平の美

螺鈿槽箏模造

明治28年(1895) 宮内庁正倉院事務所 [通期展示]

天平仏画をもとに復元された 正倉院の箏箏をもつ天平美人

重要文化財 天平の面影

明治35年(1902) 藤島武二筆 東京・石橋財団アーティゾン美術館
[展示期間: 7月18日～8月16日]

最新の写真科学技術によって

焼損前の彩りがよみがえった、カラー復元画像

[参考図版] 重要文化財 法隆寺金堂壁画写真原板(第六号壁)からのカラー復元画像

カラー復元画像：富士フィルム 写真原板：法隆寺、便利堂



用語解説

南都仏画

奈良時代に平城京が営まれた奈良の地は、平安京への遷都後も「南都」と呼ばれ、仏教文化の都であり続けました。本展覧会では、南都の寺院で礼拝され、南都の絵仏師たちによって連綿と描き継がれてきた仏教絵画を「南都仏画」と総称します。その特色は、南都仏教が誕生した奈良時代の図像や絵画様式を規範とし、最新の大漆の絵画技法も導入しながら形づくられた、力強い線描と明快な彩色が生み出す理想的なほとけの姿にあります。

法隆寺金堂壁画

法隆寺金堂の外陣は、釈迦・阿彌陀・弥勒・薬師の説法図など全12面の壁画によって壮麗に彩られていました。その力強い線描が生み出す雄大なほとけの姿や、絵具の濃淡による陰影法を駆使した立体表現は、遣唐使がもたらした初唐様式を濃厚に反映するものであり、日本古代仏教絵画の最高峰に位置づけられています。昭和24年(1949)の火災で惜しくも焼損しましたが、被災前に撮影された写真や精巧な模写が、南都仏画の原点となる名画の往時の姿を今に伝えています。

内山永久寺

平安時代の永久2年(1114)、鳥羽上皇の勅願により創建された内山永久寺は、かつて「西の日光」とも称されるほどの壮麗な伽藍を誇った南都の大寺院でした。興福寺の有力な末寺として、また奈良・石上神宮の神宮寺として発展しましたが、明治期の神仏分離政策により廃寺となりました。現在は建物こそ失われたものの、散逸した貴重な寺宝の多くが近隣の社寺や国内外の美術館・博物館に所蔵されており、まぼろしの名刹の歴史と美を今に伝えています。

重命

中世の興福寺で仏画制作を担った「南都絵所」のうち、松南院座・吐田座・芝座の三工房が有力でした。鎌倉時代の松南院座の絵仏師・重命は、内山永久寺において四天王像(ボストン美術館蔵)や不動明王および八大童子像(世田谷山観音寺蔵)の彩色を担うなど、南都の有力寺院で多岐にわたる作画活動を行いました。重命が作業後に「南都の家」へ帰宅した旨を記す史料も残されており、南都に拠点を構えた絵仏師の最古の記録として貴重です。

ボストン美術館

アメリカ独立100周年にあたる1876年7月4日に開館した米国を代表する私立美術館。海外における日本美術の最大のコレクションを誇っており、とりわけ東大寺旧蔵「法華堂根本曼陀羅」に代表される奈良ゆかりの仏教美術コレクションは、19世紀末にアーネスト・フェノロサらが神仏分離政策の余波によって危機に瀕した寺宝を保護したことで形成されました。そしてフェノロサの教え子だった岡倉天心が、現在まで続くボストン美術館の日本美術部門の礎を築いたのです。

アーネスト・フェノロサ (1853-1908)

米国マサチューセッツ州出身の哲学者・美術史学者。ハーバード大学を卒業後、明治11年(1878)に来日し、東京大学で哲学の教鞭を執る傍ら、日本美術に深い関心を寄せました。助手の岡倉天心とともに奈良の古社寺を中心に、日本各地の文化財の調査・保護に従事し、その調査過程で発見した名品の数々を自ら収集しました。帰国後にボストン美術館東洋部長に就任すると、その膨大なコレクションを同館に寄贈し、日本美術研究の先駆者としてその精華を世界に紹介しました。

岡倉天心 (1863-1913)

東京大学の助手としてフェノロサに学んだ後、文部省の技官として全国の古社寺調査に従事。特に奈良の古社寺調査を通じて仏教美術の価値を再発見し、帝国奈良博物館(奈良国立博物館の前身)の設立など文化財保護に尽力しました。東京美術学校長として法隆寺金堂壁画など古画の模写を通じた新日本画の創出を指導し、後に渡米してボストン美術館の中国・日本美術部長に就任。同館の日本美術コレクションを体系化し、その価値を世界に広く発信しました。

開催概要

ボストン美術館共同企画

特別展「南都仏画—よみがえる奈良天平の美—」

- 会期 ————— 2026年7月18日(土)～9月13日(日)
前期：7月18日(土)～8月16日(日) 後期：8月18日(火)～9月13日(日)
※会期中、一部の作品は展示替えを行います。
- 休館日 ————— 毎週月曜日、7月21日(火) ※ただし、7月20日(月・祝)、8月10日(月)は開館
- 開館時間 ————— 午前9時30分～午後5時
※毎週土曜日は午後7時まで ※8月5日(水)～7日(金)、8月9日(日)～14日(金)は午後6時まで
※入館は閉館の30分前まで
- 会場 ————— 奈良国立博物館 東西新館
- 主催 ————— 奈良国立博物館、NHK奈良放送局、NHKエンタープライズ近畿、朝日新聞社
- 協賛 ————— きんでん、ダイキン工業、竹中工務店、南都銀行、NISSHA
- 特別協力 ————— ボストン美術館
- 協力 ————— 日本航空、富士フイルム、仏教美術協会
- 特別支援 ————— DMG森精機
- 観覧料 ————— 一般 2,200円(2,000円)、高大生 1,500円(1,300円)、中学生以下無料
※()内は前売券と20名以上の団体料金。※高大生の方は学生証をお持ちください。※未就学児、障がい者手帳またはミライロIDをお持ちの方(介護者1名を含む)、奈良博メンバーシップカード会員の方(1回目及び2回目の観覧)、賛助会会員(奈良博、東博〔旧シルバー会員・ブロンズ会員を除く〕、九博)、清風会会員(京博)は無料。※本展の観覧券で、名品展(仏像館・青銅器館)もご覧になれます。※奈良国立博物館キャンパスメンバーズ会員(学生)の方は400円、同(教職員)の方は2,100円で当日券をお求めいただけます。観覧券売場にて学生証または職員証をご提示ください。

[チケット販売場所]

- 展覧会公式オンラインチケット ●ローソンチケット Lコード：55521
 - セブンチケット セブンコード：114-964 ●近鉄の駅営業所 ●奈良国立博物館観覧券売場 ほか
- ※チケット購入の際に、プレイガイドによって各種手数料が発生する場合がございます。
※奈良国立博物館観覧券売場での前売券販売はございません。

[展覧会公式サイト] — <https://nantobutsuga2026.exhibit.jp>

[展覧会公式X] — @nantobutsuga26

[プレスお問い合わせ]

「南都仏画—よみがえる奈良天平の美—」広報事務局(TMオフィス内) 担当：馬場・永井・西坂
MOBILE：090-6065-0063(馬場) 090-5667-3041(永井)
TEL：050-1807-2919 FAX：050-1722-9032
〒541-0046 大阪府大阪市中央区平野町4-7-7 平野町イシカワビル
E-MAIL：nantobutsuga@tm-office.co.jp



奈良国立博物館
NARA NATIONAL MUSEUM

〒630-8213 奈良県奈良市登大路町50番地
[お問合せ] 050-5542-8600 (ハローダイヤル)
[交通案内] 近鉄奈良駅から登大路を東へ徒歩約15分、
JR奈良駅または近鉄奈良駅から市内循環バス外回り
「氷室神社・国立博物館」バス停下車すぐ